

教育実習事前指導のあり方について

2. 教育実習に対する学生の不安要因

杉山 喜美恵

はじめに

平成14年度より保育士養成カリキュラムの科目改正がおこなわれ、学生にとっては実習の機会が増えることになる。実習は、学生が今まで培ってきた技術や知識を実体験する場であると同時に、今の自分を止揚させる大切な機会である。そのような実習の機会が増えることは学生にとっては喜ばしいことである。しかし、だからこそひとつひとつの実習の意義や目的をしっかりと理解させることが重要となってくる。そのためにも、「実習事前指導のあり方」を再度、考え直さねばならない。

「実習事前指導のあり方」については、保育士養成協議会などにおいても、常に研究発表のテーマや分科会の議題として取り上げられている。そのことは、とりもなおさず多くの養成校で事前事後を含めた実習指導のあり方が模索されているということであろう。

筆者は、「よりよい実習事前指導のありかたとは」というテーマで調査研究を進めている。第一報では、幼稚園の教育実習評価にどのような事柄が関連しているのかを明らかにしようと試みた。その結果、個人的資質と実技系の科目の成績が教育実習評価に関連していることがわかった。¹⁾

今回の調査では、実習の評価という観点からではなく、「学生側から」という視点で、学生の実習前後の意識について分析を試みた。すなわち、実習に対する不安意識が実習に対して影響を与えているのではないかと考えたのである。どのような項目に対する不安が高いのか、不安の高い項目間に何らかの関連は見られるのか、実習前の意識が実習後にどう変化しているのかなどを調べることにより、それらから得られた結果を実習事前指導に活

かしていきたいと考えている。

研究の枠組み

1. 調査対象者

東海女子短期大学児童教育学科幼児教育専攻、1999年度入学生112名および2000年度入学生99名の計211名。

2. 調査時期

2000年1月～3月および2001年1月～3月

3. 調査方法

調査は調査用紙を用い、実習前の調査については、「観察実習プレアンケート」として、「実習概説」の講義の中で、クラスごと記名式で実施した。また、実習後の調査は「観察実習ポストアンケート」として実習後に各自で回答の上、送付あるいは持参させた。

調査用紙は、実習前、実習後とも211名の学生に対して配布したが、実習後調査の回収率は低く、実習前調査と実習後調査の対比分析は、両者をともに提出した学生のみを集計であり(137名)、実習前調査のみの提出者については分析対象としていない。

使用したアプリケーションソフトはそれぞれ次のとおりである。データ入力、EXCEL²⁾を、集計および分析はSPSS³⁾を用いた。

4. 調査内容

学生からのヒアリングをもとに、実習に行くにあたって、不安に思う項目を以下の12項目にまとめた。また、実際に実習を行ってみてどう感じたかという質問に対し、実習前と実習後の比較をするために、実習前の項目と同様の12項目を設定した。項目は以下のとお

りである。

<実習前>～観察実習プレアンケート～

<実習後>～観察実習ポストアンケート～

1. 園児の前でピアノを弾くこと
2. 最後まで体調良く実習できるか
3. 園児の前でうまく話すこと
4. 担当の先生とうまくやっていくこと
5. 園児と遊ぶこと
6. 園児の気持ちをつかむこと
7. 他の実習生とうまくやっていくこと
8. 実習記録簿をつけること
9. 言葉遣い
10. 毎日、朝、定時に出勤すること
11. 保護者への対応
12. 紙芝居や絵本などの読み聞かせ

これらの項目について、実習前調査においては、「不安に思う」、「わりと思う」、「どちらでもない」、「あまり思わない」、「全然思わない」の5件法で評定を求めた。

分析にあたっては、不安に思う程度が強いほど、高得点になるように、「不安に思う」、「わりと思う」、「どちらでもない」、「あまり思わない」、「全然思わない」に対し、それぞれ、5、4、3、2、1点を与え、得点とした。

また、実習後調査においては、各項目について、「うまくできた」、「わりとうまくできた」、「どちらでもない」、「あまりうまくできなかった」、「うまくできなかった」の5件法で評定を求めた。さらに、達成感が強いほど、高得点になるように、「うまくできた」、「わ

りとうまくできた」、「どちらでもない」、「あまりうまくできなかった」、「うまくできなかった」に対し、それぞれ、5、4、3、2、1点を与え、得点とした。

結 果

1. 学年差の検証

この調査は、1999年度入学生および2000年度入学生に対して行ったものである。分析を進めるにあたって、この2学年の学生の回答に差があるかを調べた。検定をおこなった結果、2つの学年間には統計的に有意な差がないことが検証されたので ($p>.01$)、2つの学年の回答を統合した形で分析を進めていくことにする。

2. 実習前調査の分析

(1) 単純集計結果

最初に、調査内容で示した12項目について、どの程度不安に思うかという質問に対する回答をまとめたものが表1である。これによると、不安に思う項目として多くの者があげたのは、順に「園児の前でピアノを弾くこと」(68.1%)、「実習記録簿をつけること」(47.1%)、「保護者への対応」(46.6%)であった。反対に、不安に思わない項目としてあげられたのは、「他の実習生とうまくやっていくこと」(21.2%)、「毎日、朝、定時に出勤すること」(20.7%)、「最後まで体調良く実習できる」(18.1%)であった。

表1 実習に行くにあたり不安に思う項目

上段：実数 (人)
下段：割合 (%)

	ピアノを弾く	良い体調を保つ	園児の前でうまく話す	担当の先生との関係	園児と遊ぶ	園児の気持ちをつかむ	他の実習生との関係	実習記録簿をつける	言葉遣い	遅刻しない	保護者への対応	読み聞かせ
不安に思う	143 68.1%	21 10.0%	75 35.7%	84 40.0%	12 5.7%	65 31.0%	14 6.7%	99 47.1%	42 20.0%	17 8.2%	97 46.6%	59 28.1%
わりと思う	36 17.1%	48 22.9%	76 36.2%	85 40.5%	50 23.8%	79 37.6%	36 17.3%	73 34.8%	61 29.0%	30 14.4%	67 32.2%	70 33.3%
どちらでもない	7 3.3%	53 25.2%	34 16.2%	24 11.4%	56 26.7%	32 15.2%	66 31.7%	24 11.4%	46 21.9%	40 19.2%	40 19.2%	29 13.8%
あまり思わない	20 9.5%	50 23.8%	17 8.1%	13 6.2%	56 26.7%	32 15.2%	48 23.1%	10 4.8%	46 21.9%	78 37.5%	2 1.0%	32 15.2%
全然思わない	4 1.9%	38 18.1%	8 3.8%	4 1.9%	36 17.1%	2 1.0%	44 21.2%	4 1.9%	15 7.1%	43 20.7%	2 1.0%	20 9.5%
計	210 100.0%	210 100.0%	210 100.0%	210 100.0%	210 100.0%	210 100.0%	208 100.0%	210 100.0%	210 100.0%	208 100.0%	208 100.0%	210 100.0%

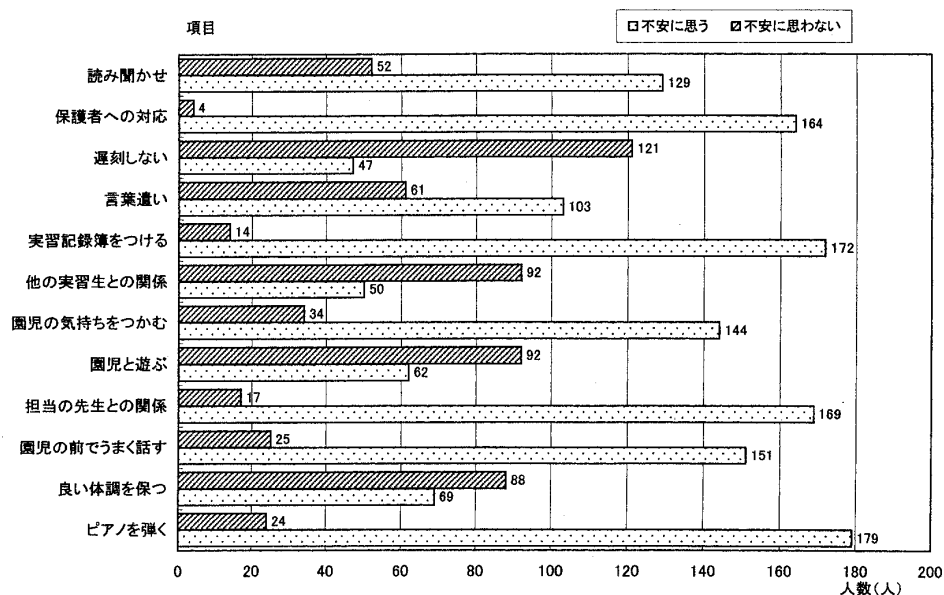


図1 不安意識の高低比較

さらに、広く不安傾向を調べるために、「不安に思う」「わりと思う」と回答した者の数を、また、「不安に思わない」、「あまり思わない」と回答した者の数を統合し、図表化した(図1)。これによると、不安に感じている者が多い項目は、「園児の前でピアノを弾くこと」(85.2%)、「毎日、実習記録簿をつけること」(82.0%)、「担当の先生とうまくやっていくこと」(80.4%)、「保護者への対応」(78.8%)の順であり、順位的には表1の結果と若干の異なりはあるものの内容的には共通している。

上位項目については、約8割以上の学生が不安を感じており、実習に対する学生の不安意識は項目によってはかなり高いといえる。

また、不安に思わない項目としては「毎朝、定時に出勤すること」(58.2%)、「園児と遊ぶ」(43.8%)、「他の実習生とうまくやっていくこと」(44.2%)の順であった。不安に思わない項目においては、上位3項目で約半数の者しか「不安に思わない」と答えている。これらのことを併せみても学生は実習に対して強い不安感を感じているといえる。

(2) 項目間の関連

次に、12項目間の関連を調べた。分析にあたって、実習前調査における調査対象者211

名の平均、標準偏差、分散を示したものが表2である。

まず、各項目間の相関係数を求めた(表3)。かなり多くの項目間で、1%水準での統計的に有意な正の相関が見られた。特に「園児と遊ぶこと」という項目と「園児の気持ちをつかむこと」との間には、高い正の相関が見られた(.559)。

また、「言葉遣い」は、「実習記録簿をつけること」(.518)と、「絵本や紙芝居の読み聞かせ」(.501)の2項目と、「保護者への対応」は、「担当の先生とうまくやっていくこと」(.537)、「園児の気持ちをつかむこと」(.545)、「絵本や紙芝居の読み聞かせ」(.544)の3項目と高い正の相関が見られた。

(3) 因子分析

項目間の因子構造を見るために、211名の回答を対象に、項目に関して主因子法、バリマックス回転による因子分析を行った。その結果、有効と思われる3因子が抽出された。

各因子の寄与率、因子負荷量をまとめたものが表4である。第1因子は、接遇・マナーなどの社会的コミュニケーションに関する因子、第2因子は、対園児コミュニケーションに関する因子、第3因子は、体調維持に関する因子とした。各因子の α 係数は、それぞれ

表2 実習前調査の項目別平均、標準偏差

項目	有効数	平均	標準偏差
園児の前でピアノを弾く	211	4.3602	1.1055
最後まで体調良く実習する	211	2.7583	1.2811
園児の前でうまく話す	211	3.8341	1.1322
担当の先生とうまくやっていく	211	3.981	1.0234
園児と遊ぶ	211	2.673	1.1638
園児の気持ちをつかむ	211	3.7773	1.1266
他の実習生とうまくやっていく	211	2.5640	1.2534
実習記録簿をつける	211	4.2654	.9339
言葉遣い	211	3.2654	1.1612
毎朝、定時に出勤する	211	2.5924	1.2324
保護者への対応	211	4.0427	1.0296
紙芝居や絵本などの読み聞かせ	211	3.4976	1.2165

表3 実習前調査項目間の相関

	ピアノを弾く	良い体調を保つ	園児の前でうまく話す	担当の先生との関係	園児と遊ぶ	園児の気持ちをつかむ	他の実習生との関係	実習記録簿をつける	言葉遣い	遅刻しない	保護者との関係
ピアノを弾く											
良い体調を保つ	.092										
園児の前でうまく話す	.071	.345 **									
担当の先生との関係	.185 *	.240 **	.395 **								
園児と遊ぶ	.243 **	.254 **	.391 **	.352 **							
園児の気持ちをつかむ	.250 **	.201 *	.423 **	.472 **	.559 **						
他の実習生との関係	.061	.076	.224 **	.410 **	.153	.301 **					
実習記録簿をつける	.181 *	.263 **	.326 **	.384 **	.277 **	.378 **	.395 **				
言葉遣い	.157	.150	.313 **	.414 **	.346 **	.380 **	.366 **	.518 **			
遅刻しない	.107	.373	.089	.171	.189 *	.202 *	.136	.338 **	.205 *		
保護者との関係	.299 **	.078	.445	.537	.341 **	.545 **	.338 **	.342 **	.437 **	.015	
読み聞かせ	.146	.146	.449	.356	.378 **	.466 **	.205 **	.369 **	.501 **	.133	.544 **

*:p<.05 **:p<.001

表4 不安項目(実習前調査)における因子分析結果

(有効サンプル=211)	
調査項目	因子負荷量
I 社会的コミュニケーション (α=.6634)	
実習記録簿をつけること	.526
言葉遣い	.595
保護者への対応	.593
固有値	4.316
II 対園児コミュニケーション (α=.5430)	
園児の前でうまく話すこと	.607
園児と遊ぶこと	.669
園児の気持ちをつかむこと	.593
固有値	1.189
III 体調維持(α=.7182)	
最後まで体調良く実習できるか	.453
毎日、朝、定時に出勤すること	.698
固有値	1.051

.6950、.7182、.5430であり、比較的高い内的整合性を示している。

各因子に含まれる下位項目の評定値の平均値を算出し、それぞれ、社会的コミュニケーション不安得点、対園児コミュニケーション不安得点、健康管理不安得点とした。各因子間の関係を検討するために、211名の回答に対して Pearson の相関係数を算出した（表5）。その結果、全ての因子間で有意な相関が見られた。特に、対園児コミュニケーション不安と健康管理不安の間で比較的高い相関が見られた（.616）。自分の体調についての不安が高まると園児と関わるということに対する不安も高まるといえる。

表5 各因子間の相関

	1.	2.
1. 社会的コミュニケーション		
2. 対園児コミュニケーション	.312 **	
3. 体調維持	.330 **	.616 **

**p<.01

3. 実習後調査

実習後調査に関しては、実習前に調査した12項目について、実際に行ってみてどうだったかという質問に対し、「うまくいった」、「わりとうまくいった」、「どちらともいえない」、「あまりうまくいかなかった」、「うまくいかなかった」の5件法で回答を得た。137名の回答を集計した結果（表6）、「うまくいった」との回答が多かったのは、「毎日、朝、

定時に出勤する事」（95.6%）、「園児と遊ぶこと」（94.9%）、「担当の先生とうまくやっていくこと」（86.1%）の順であった。「毎日、朝、定時に出勤すること」と「園児と遊ぶこと」に関しては、非常に高い割合を示しており、ほとんどの者がうまくいったと考えている。最も割合が低い項目でも24.1%（「園児の前でピアノを弾くこと」）であり、これらのことから、どの項目に関しても比較的上々よくいったと感じている者が多いといえる。反対に、「うまくいかなかった」という回答が多かった項目は、「最後まで体調良く実習できる」（32.1%）、「園児の前でうまく話す」（19.0%）、「実習記録簿をつける」（18.5%）であるが、割合としては比較的低い。特に、「他の実習生とうまくやっていくこと」に関してはうまくいかなかったと感じている者はまったくいなかった。以上のことから、学生は、実習後、全ての項目に関して比較的上々よくいったと感じている傾向がうかがわれる。

4. 実習前調査と実習後調査の関連

「他の実習生とうまくやっていくこと」については、実習前の調査で不安に思わないと答えた者が12項目中最も多かったが（44.2%）、実習後でも「うまくいかなかった」と答えた者が一人もいなかった。このことから、自分と同年代の者とのコミュニケーションについては、目上の者とのコミュニケーションに比べると、あまり不安に感じていないことがわ

表6 実際に体験してどうだったか

上段：実数（人）
下段：割合（%）

	ピアノを弾く	良い体調を保つ	園児の前でうまく話す	担当の先生との関係	園児と遊ぶ	園児の気持ちをつかむ	他の実習生との関係	実習記録簿をつける	言葉遣い	遅刻しない	保護者への対応	読み聞かせ
うまくできた	6 4.4%	53 38.7%	32 23.4%	58 42.3%	91 66.4%	26 19.0%	55 50.0%	20 14.8%	24 17.5%	106 77.4%	24 17.6%	22 16.5%
わりとうまくできた	27 19.7%	32 23.4%	54 39.4%	60 43.8%	39 28.5%	71 51.8%	25 22.7%	49 36.3%	71 51.8%	25 18.2%	55 40.4%	59 44.4%
どちらでもない	46 33.6%	8 5.8%	25 18.2%	15 10.9%	5 3.6%	26 19.0%	30 27.3%	41 30.4%	33 24.1%	3 2.2%	50 36.8%	32 24.1%
あまりうまくできなかった	16 11.7%	34 24.8%	23 16.8%	4 2.9%	2 1.5%	13 9.5%	0 0.0%	19 14.1%	8 5.8%	2 1.5%	5 1.0%	17 12.8%
うまくできなかった	7 5.1%	10 7.3%	3 2.2%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.7%	0 0.0%	6 4.4%	1 0.7%	1 0.7%	1 1.5%	3 2.3%
おこなわなかった	35 25.5%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	27 24.5%	2 1.5%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.0%	4 3.0%
計	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%	137 100.0%

かる。この項目で「できた」と答えた者の割合が比較的低いのは、137名中、27名の者が他の実習生がいなかったと回答したため、有効回答数が少なくなったからである。

反対に、実習前の調査では、「担当の先生とうまくやっていくこと」に対して不安を感じているものの割合は高かったが(80.4%)、実習後の調査では、86.1%の者がうまくできたと感じていることから、不安に感じたわりに実際にはうまくいった者と感じているが多かったと推察される。このように、実習前に調査した不安についての回答と実体験後の回答との間には何らかの関連があるように思われる。そこでこの関連を調べる事とした。この分析に関しては、実習後の調査が回収された137名を対象とした。

(1) 度数からの分析

実習前と実習後の調査結果の関連をさらに検討するためにクロス集計をおこなった。それぞれの度数を実習前の調査では、「不安に思う」と「わりと不安に思う」という回答をまとめ、「不安が高い」とし、「不安に思わない」と「あまり不安に思わない」という回答をまとめ、「不安が低い」とした。同様に、実習後の調査では、「うまくいった」と「わりとうまくいった」という回答をまとめ、「うまくいった」に、「うまくいかなかった」と「あまりうまくいかなかった」という回答をまとめて「うまくいかなかった」とし、図表化した(図3～図14)。項目によっては、十分な度数が得られなかったものもある。

これらの図からはさまざまな読み取りができるが、これからの事前指導の内容の検討のために、「できなかった」という回答に注目して実習前後の検討をしてみたい。

まず、不安意識が高くてなおかつ達成感も低い項目をみでみる。実習前調査において不安意識の方が高い項目は、「園児の前でピアノを弾くこと」、「担当の先生とうまくやっていくこと」、「実習記録簿をつけること」、「言葉遣い」、「園児の気持ちをつかむこと」、「保護者への対応」、「紙芝居や絵本などの読み聞

かせ」の7項目である。その中で「うまくできなかった」割合が比較的多い項目は、「園児の前でピアノを弾くこと」、「実習記録簿をつけること」、「紙芝居や絵本などの読み聞かせ」の3項目である。これらは技術的な項目であり、実技面での未熟さのために、自分の技術力に自信が持てないという学生の姿がうかがわれる。不安意識が高かったが、実際にやってみると比較的うまくいったと考えられた項目は「担当の先生とうまくやっていくこと」、「言葉遣い」、「園児の気持ちを掴むこと」、「保護者への対応」である。これらは人とのコミュニケーションという要素を多く含む項目であるといえる。

次に、不安に思わないという意識の方が高かった項目は、「他の実習生とうまくやっていくこと」、「園児の前でうまく話すこと」、「最後まで体調良く実習できる」、「園児と遊ぶこと」、「毎日、朝、定時に出勤すること」の5項目である。その中でできなかったという割合が比較的多い項目は、「園児の前でうまく話すこと」、「最後まで体調良く実習できる」の2項目であった。反対に、不安にも思わなかったし、やってみたらうまくできたという自分の予想通りであった項目は、「園児と遊ぶこと」、「他の実習生とうまくやっていくこと」、「毎日、朝、定時に出勤すること」であった。もともとこの幼児教育専攻の学生は、比較的孩子も好きである⁴⁾ことからみても、園児と一緒に遊ぶことについては、あまり不安を感じていないと考えられる。

(2) 高不安群と低不安群との比較

クロス集計結果より、学生の実習前後の意識変化を「できなかった」と回答した項目に注目して分析をしたが、次に、実習前の不安意識の高低が実習後の達成感にどう影響しているかの検討をしてみたい。そこで、実習前の調査で不安意識の高いグループと、低いグループを抽出して、実習後の達成感との関連を調べるために、各グループの平均値に対して検定をおこなった。この分析も実習前と実習後の回答が得られた137名を対象にした。

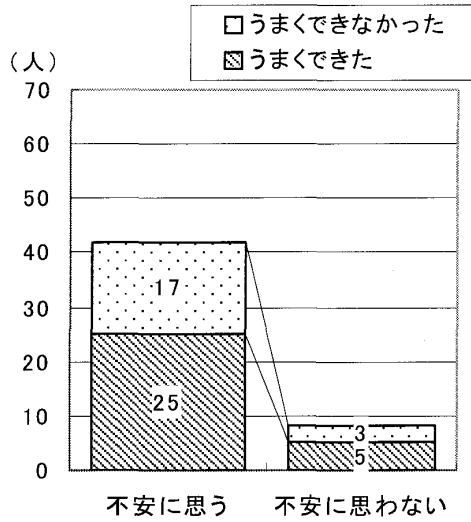


図2 園児の前でピアノを弾くこと

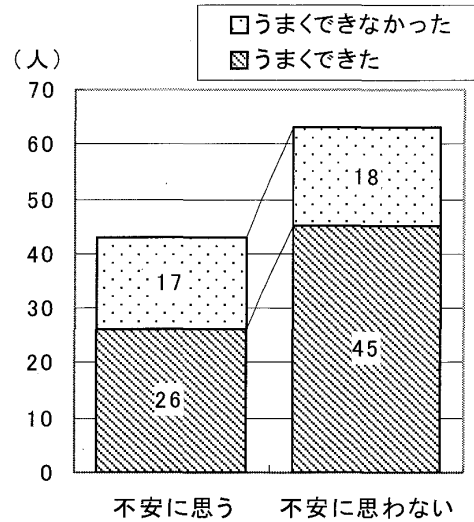


図3 最後まで体調良く実習できる

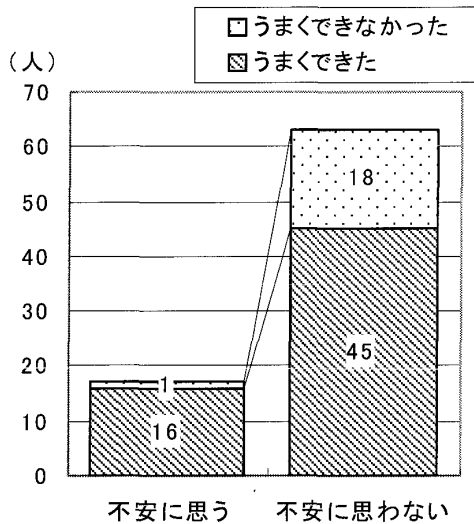


図4 園児の前でうまく話すこと

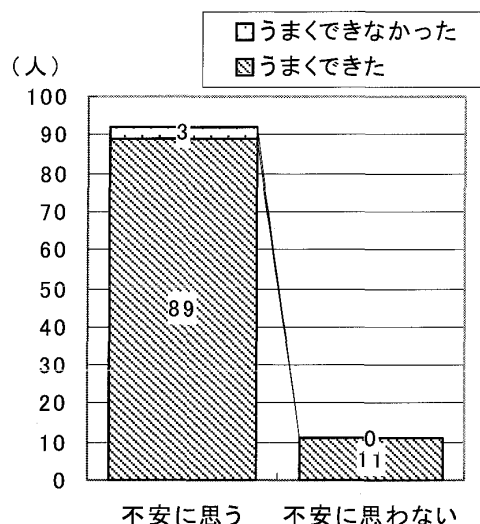


図5 担当の先生とうまくやっていくこと

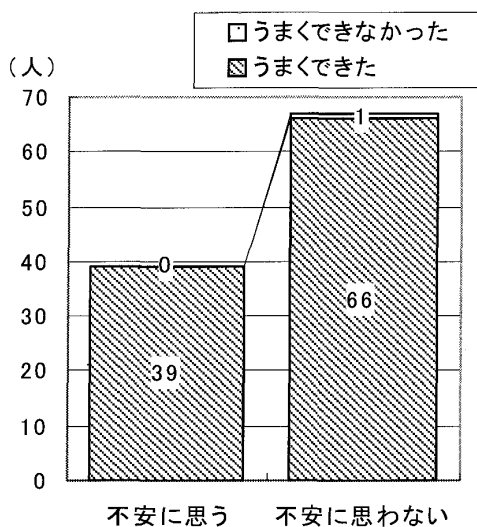


図6 園児とあそぶこと

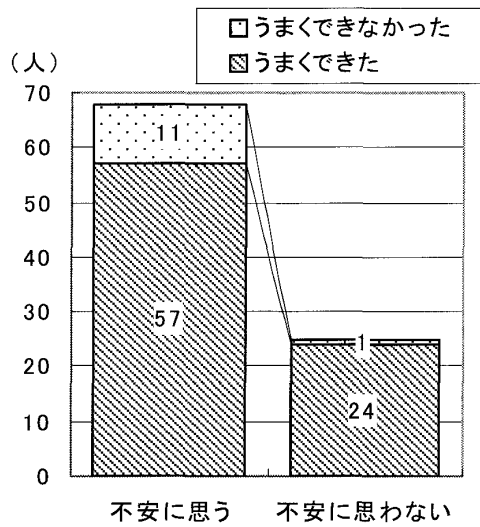


図7 園児の気持ちをつかむこと

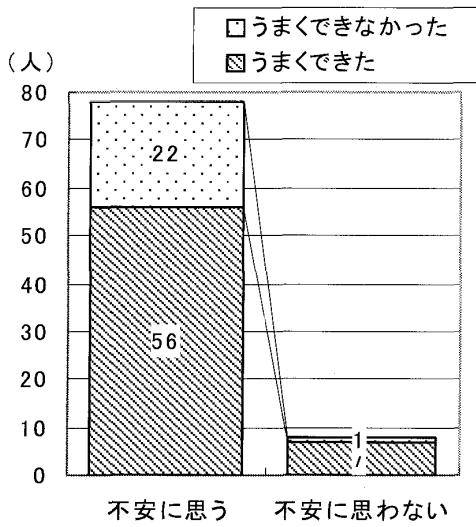


図8 実習記録簿をつけること

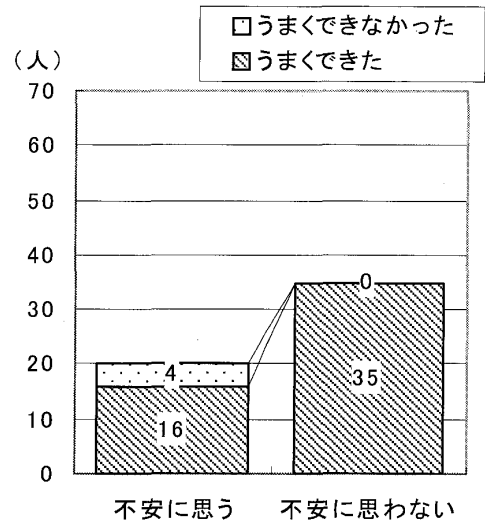


図9 他の実習生とうまくやっていくこと

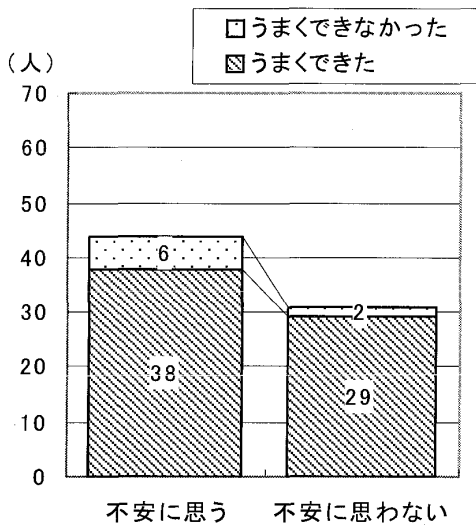


図10 言葉遣い

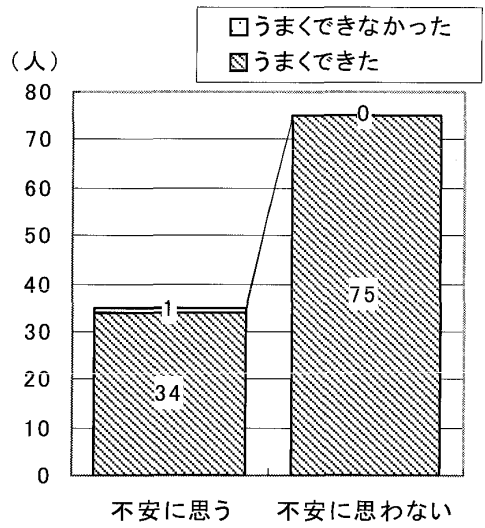


図11 毎日、朝、定時に出勤すること

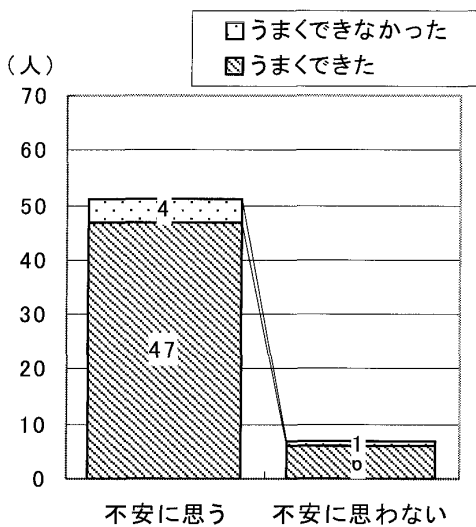


図12 保護者への対応

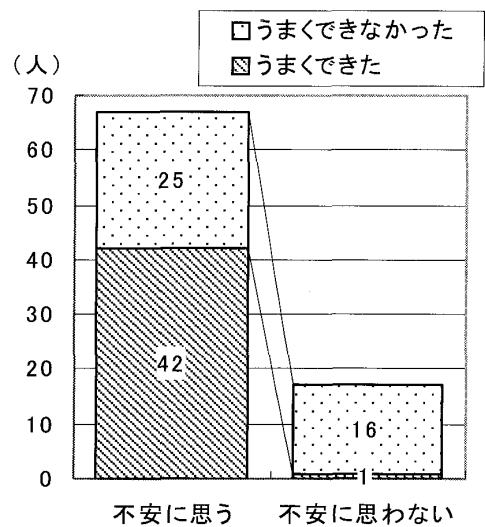


図13 紙芝居や絵本などの読み聞かせ

まず、実習前調査の12項目それぞれについて、2の(2)でおこなったように「不安に思う」、「わりと思う」、「どちらでもない」、「あまり思わない」、「全然思わない」に対し、それぞれ、5、4、3、2、1点を与え、調査対象者ごとの得点を合算し、平均を算出し、実習前得点とした。さらに、算出された実習前得点の降順に調査対象者をソートし、得点の高い4分の1を取り出し(34名)、高不安群とした。同様に、得点の低いほうから4分の1にあたる34名を抽出し、低不安群とした。

表7 不安意識の高群・低群の平均

	実習前調査		実習前調査	
	実数	平均	実数	平均
不安高群	34	4.245**	34	3.605
不安低群	34	2.514	34	3.816

高不安群と低不安群の実習前調査および実習後調査の平均値を算出し、2グループの平均値に関して検定をおこなった(表7)。

その結果、実習前調査に関しては、高不安群と低不安群の間に1%水準で有意な差が見られたが、実習後調査に関しては、有意な差がみられなかった。このことより、実習後の達成感について、実習前の不安の高低は関連性が低いということがわかった。

考 察

実習前の調査より、学生は実習に行くにあたって、かなり高い不安を感じていることがわかった。特に、園児の前でピアノを弾くこと、毎日、実習記録簿をつけること、あるいは、担当の先生や保護者の方とのコミュニケーションについて、不安が高い。ピアノを弾くことや、実習記録簿については、短大で学習しているとはいえ、実際に教育現場で自分の技能や技術がどれくらい通用するかということは学生にとって未知のことがらである。また、同年代である他の実習生とのコミュニケーションに対しては、あまり不安に思っていないが、担当の先生や保護者という目上の人への対応能力については、やはり、そのような

体験が少ないため不安感が高い、つまり体験の少ないことに対して不安が高くなるのではないかと推察される。

前回の調査より、「姿勢が前向きで、対人関係が比較的うまくいっていると感じている学生は、そうでない学生よりも実習で高い評価を得ている」⁵⁾、あるいは、「実技科目が得意なものは、そうでない者よりも教育実習では比較的高い評価を得ている」⁶⁾ということがわかった。したがって、対人関係の技術や実技科目に対する能力を高めることがより高い評価をうける要因のひとつであると同時に学生の不安の軽減にもつながることが示唆された。

このように高い不安感を持って学生は実習に臨むのだが、実習後には比較的うまくいったと感じている。例えば、担当の先生とのコミュニケーションについては、特にうまくいったと感じている学生が多かった。つまり、彼女らの心配は、結果的には杞憂に過ぎなかったということもできる。ほかに、「園児の気持ちを掴むこと」や「言葉遣い」なども同様の傾向を示した。

しかし、ここで注意しなければならないのは、「うまくいった」ということが学生の主観で語られているということである。客観的な視点で評価した場合に、必ずしも学生と同様、「うまくいった」とは言えない場合も出てくる、ということである。

実習園からの評価と学生の自己評価が食い違っているということはよくある。やはりそれは、両者の評価基準が異なることも一因であろう。また、ある事柄に対する不安が高い場合には、その事柄を実際に体験した際、それに対する評価に「自分が思ったよりは」あるいは、「心配したわりには」ということばが「うまくいった」の前につく場合もある。そのような場合は、比較的自己評価が客観的評価よりも高くなるということはあるであろう。

従って、自己評価だけではなく、実習園側からの調査も分析対象とする必要がある。また、不安に感じやすいといった調査対象者自

身に固有な性格的影響も考えられる。そのような視点からの調査も次回の課題である。さらに、学生の各項目に対する「うまくできた」とする評価基準についても検討の余地がある。

実習後の調査回答の分析から、「うまくできた」と感じている学生が多いということがいえるとしても、「うまくできなかった」と学生が感じている項目に注目する必要がある。「園児の前でピアノを弾くこと」、「紙芝居や絵本などの読み聞かせ」、「実習記録簿をつけること」、「最後まで体調良く実習できる」、「園児の前でうまく話す」の5項目があげられるが、内容的に技術的なものが多い。観察実習は学生にとって初めての实習であり、期間も1週間と短いため、学生によっては、なかなか実習という雰囲気になれることが難しく、養成校で学習したとおりの実力が園児の前で発揮できなかつたり、自分の技術を試す機会もあまり多くなかつたとも考えられる。

実習は、幼稚園の観察実習に始まり、保育所、そして再度幼稚園での実習と続いていく。学生の「うまくできなかった」という意識は実習を経るごとにどう変化していくか、経験を積んでいくにつれて「うまくできた」と思う割合が多くなるのか、やはり、実際に教育現場での経験を積まないと意識は変化しないのか非常に興味のあるところである。

ただし、実習前の高不安群と低不安群の不安得点に有意な差が見られたのに対し、実習後の高不安群と低不安群の達成感得点には有意な差が見られなかつたことを考慮すると、実習前に不安が高かつたからといって、あまり不安を感じていなかった学生に比べて実習がうまくいかなかつたというわけではない。このことを考えると、実習前の不安感というものは実習自体に対して深刻な影響を与えるものではないということができるとはならない。

今回、取り上げた12の項目については、多くの項目間で正の相関がみられた。つまり、1つの項目の不安が高くなるほど、他の項目の不安も高くなるということである。したがって、ある項目に対する不安が低くなれば、他

の項目の不安も軽減する可能性があるといえる。絵本や紙芝居の読み聞かせや言葉遣い、実習記録簿の書き方などの指導を強化することによって、実習一般に対する不安を軽減させることができるのではないだろうか。

最後に、不安の因子構造としては、社会的コミュニケーション、対園児コミュニケーション、体調維持のまとまりになった。再度、この下位項目についても検討してみたいと考えている。

おわりに

今回の調査では、実習に対する学生の不安というものの構造について、そしてそれが実習に対してどのように影響するのかを調べた。その結果、実習に対する不安というものは未知の世界への不安といったようなもので、実際の実習の結果に深く影響するわけではないこと、ただし、感じている不安というものはかなり高いものであることが分かつた。

また、実技的な能力やコミュニケーション能力に未熟さを感じていることより、その面での指導をおこない、学生に技術面での自信をつけさせること、また、未知の事柄に対して不安が高いことより、実習以外にも子どもとふれあえる機会を多く設けるようにすること、あるいは、事前指導において不安軽減のために学生の気持ちを聞く機会を設けることができるよう、配慮していくことが重要であると考えられる。

しかし、まだ、考察で述べたように課題は多く残されている。これらの課題をひとつひとつ調査研究し、さまざまな側面から検討していく必要がある。

注

- 1) 杉山喜美恵：教育実習事前指導のあり方について1. 教育実習の評価に影響する要因、東海女子短期大学紀要第26号、2000
- 2) Microsoft Excelは、米国マイクロソフト社の商標登録である。
- 3) SPSSはエス・ピー・エス・エス株式会社の

商標登録である。

4) 注1 参照のこと

5) 注1 参照のこと

6) 注1 参照のこと

参考文献

岸井勇雄他：教育・保育実習、チャイルド本社、
2000年

秋山和夫：教育実習、北大路書房、1996年

教育・保育実習を考える会：幼稚園・保育園実習

の常識、蒼丘書林

石村貞夫：SPSSによる統計処理の手順、東京図
書、1995年

石村貞夫：SPSSによる多変量データ解析の手順、
1998年

全国保育士養成協議会：保育士養成課程シラバス、
2001年

—児童教育学科 幼児教育—